佛教大学社会学部論集　第56号（2013年3月）

初期批判理論の変容

辰　巳　伸　知

〔抄　録〕

1930年代にホルクハイマーによって定式化された「批判理論」は，その後今日に至るまで，いわゆるフランクフルト学派の旗印となってきた。批判理論の核心にあるのは，事実なるものへの物神崇拝的態度への批判や事実の社会的な被媒介性への認識，認識主体と客体は単純に分離できないという考え，伝統理論が標榜する価値自由に対する批判である。その核心自体は変わらないものの，亡命と戦争の時代を経た戦後の批判理論は，マルクス主義的な基本公理からの離反（アドルノ），そしてヘーゲル主義的マルクス主義の全体性概念からの離脱（ハーバーマス）という特徴を示すようになる。

キーワード　批判理論，フランクフルト学派，マルクス主義，全体性，解釈学

1931年にフランクフルトの「社会研究所」所長に就任したM・ホルクハイマーは，「学際的唯物論」のプランを提起する。それは，マルクス主義をベースにしつつも個別専門諸科学の最新の成果を社会哲学と相互媒介することによって，現代社会のアクチュアルな問題を批判的に解明しようとするプランであった。それを一人の天才的個人の才能に委ねるのではなく，あくまでも共同研究として構想した点に，このプランの当時としての独創性があった。1933年にヒトラーが国家権力を掌握し，そのメンバーのほとんどがユダヤ系左翼であった「社会研究所」の面々は，研究所もろとも亡命せざるをえなかったのだが，そういった困難な状況のなかでの現代社会のアクチュアルな問題とは，もちろん何よりもファシズムの問題，特に何故に労働者階級を含めて人々がヒトラーを自発的，積極的に支持したのか，という問いであった。そのような問題関心のなかから生まれたのが，フロイトの精神分析をマルクス主義的社会理論と結びつけることによって当該の問題に一定の解答を与えようとした「家族と権威」研究であった。

「学際的唯物論」の理念のもとで共同研究を指導し遂行する一方，ホルクハイマーは現代社会に適切にアプローチすることを可能にする批判的社会理論のアウトラインを描く。それ以後フランクフルト学派の旗印と目されるようになる「批判理論（kritische Theorie）」を「伝統

理論（traditionelle Theorie）」と対照して提示した論考「伝統理論と批判理論」(1)が，それである。本稿ではまず，1937 年に「社会研究所」の機関誌『社会研究誌（Zeitschrift für Sozialforschung）』に掲載されたこの綱領的論考について，やや詳細に見ていくことにする。そこで明らかになることは，ホルクハイマーのオリジナルな批判理論の構想は，従来考えられてきた以上にマルクス主義，特に G・ルカーチ経由のマルクス主義の色調が強い，という点である。それは，批判理論における労働概念，経済的下部構造の比重，変革主体としてのプロレタリアートの位置づけという諸点において見てとれる。次に，そのようにホルクハイマーによって定式化された初期批判理論が，亡命や戦争の時期を経てどのように変容したのかを，1960 年代のいわゆる「実証主義論争」における Th・W・アドルノと J・ハーバーマスの所論に即して検討してみたい。

1. 批判理論とマルクス主義――M・ホルクハイマー「伝統理論と批判理論」

ホルクハイマーが言うところの伝統理論は，デカルトの『方法序説』によって基礎づけられ，そこにその典型を見いだす認識様式によって成り立っている。伝統的な理論観は，理論を対象領域に関する命題を総括したものと考え，諸命題間の演繹体系として論理的に構築されたものととらえる。その際，理論の卓越性は，演繹体系における最高原理の少なさによって判断される。シンプルな原理からの首尾一貫した演繹体系こそが，エレガントであるとされるのである。目標とするところは数学的な記号体系であり，仮説としての理論は諸命題と出来事との，理論と経験との一致を尺度にして，その真理値が決定される。一方では事態（Sachverhalt）の知覚・確認という作業があり，他方では知の概念的構造の樹立がある。したがって，伝統理論は「思考と存在の二元論，悟性と知覚の二元論」から出発し，またそこにとどまらざるをえない，とホルクハイマーは考える。

伝統理論は，「知覚可能な世界の総体」をその対象とするが，ブルジョワ社会の成員にとってはそれは単に「事実性の総括」としてのみ現われる。伝統理論に立脚する専門学者は，「事実性の総括」に対して受動的にふるまう。しかし，社会において事実として現われるもの，伝統理論がそれに対して適応的態度をとる所与のものとは，社会的実践――この実践をホルクハイマーはしばしば「労働」と言い換えているのであり，この「労働」を鍵概念として使用するということが，後のフランクフルト学派の批判理論では見られない点である――の産物なのであり，「知覚される対象の歴史的性格と知覚器官の歴史的性格」によって，事実は前もって社会的に形成されているのである(2)。事実からなるとされる対象が社会的実践の産物である一方，ホルクハイマーは理論的営為もまた一つの社会的実践としてとらえる。「諸事実を，すでに用意された概念体系のなかに編入し，その概念体系を，矛盾の単純化ないし解消によって修正することは（中略）一般的な社会的実践の一部である。社会が集団や階級に分裂している以

上，理論的形成物も，どの集団・階級に所属するかに応じて，この一般的な実践に対して異なった関係をもつことになるのは自明である。」(3)「ブルジョワ階級とともに台頭してきた純粋に科学的な理論」は，封建制時代の解体や古い実践形式を攻撃することによって，当時胚胎していた新たな社会の到来を促進する機能を有していたが，今日の「純粋に科学的な理論」は交換価値が支配する資本主義的市場の単なる函数になっている。「仮説の形成，一般に理論的な仕事は，現下の社会的諸関係のもとで原則的に利用可能性のあるような労働，つまり需要のあるような労働である。」(4)

伝統理論は，自らが扱う問題や事実の社会的な由来や，学問が利用されるコンテクストや目的を学問外的なものとして排除するが，マルクスの政治経済学批判にそのモデルが見いだされる社会についての批判理論は，現在の経済的様式や文化の総体を人間の労働の産物ととらえ，自らもそれに属すものと考える。伝統的な理論概念と批判的な理論概念の対立点は，どのような対象を扱うかということ以上に，主体についてのとらえ方にある。ブルジョワ的思考にとっての主体は，たとえばドイツ観念論哲学に典型的に示されているように，自律的なものであり抽象的なものであり，場合によってはフィヒテの哲学において見られるように世界の根源をなすものと考えられている。さもなくば，民族主義的イデオロギーの場合のように，無媒介に抽象的実体としての全体的なものに同化させられる。それに対して，批判的思考にとっての主体とは，「社会の全体，および自然との媒介された絡みあいのなかに置かれている個人」(5)なのである。批判理論は，このような主体が実践する営為として自らをも反省的にとらえる。

ホルクハイマーにとっては，社会は人間の社会的実践すなわち労働の産物なのであるが，同時に社会は人間外的な自然過程，人間とは疎遠なメカニズムとして経験される。「この世界は，主体の世界ではなく資本の世界」(6)なのである。人間の社会的実践すなわち労働の所産であるはずの社会が人間から自立し，「第二の自然」となって人間に対立する。さらには，人間の理性的コントロールからはずれたその社会自体は，矛盾や対立，非合理に満ちたものとなる。社会についての批判理論は，先に見たように伝統理論に依拠して事実を究極的なものと見なす専門学者とは異なって，事実という素材を人間の行なう生産や労働と関係するものと見なすのであるが，同時にそれを目的意識的な人間の能動性が及ばない非合理な存在の断片と考える。批判理論の対象は，単なる所与としての自然ではなく，「自らの歴史的生活形態全体の生産者としての人間」なのであるが，現代社会において人間は社会の主体ではなく，客体へと貶められている。批判理論の課題は，社会のそうした倒錯し分裂した性格を「意識された矛盾」へと展開することにある。そのために批判理論は，価値判断を排除すべしとする伝統理論の要求を斥け，「人間活動を理性的に組織するという関心」(7)をあくまでも堅持しようとする。「批判理論が目標とするのは，いかなる場合でも単に知識としての知識を増やすことではなく，隷従を強いる諸関係から人間を解放することである。」(8)

ホルクハイマーによる「伝統理論と批判理論」という綱領的テクストには，これ以後フラン

クフルト学派における批判理論の準拠点となるような基本的テーゼが盛りこまれている。すなわち，事実なるものへの物神崇拝的態度への批判，事実は社会的に幾重にも媒介されているという認識，認識主体と客体は単純に分離さえず，むしろ認識主体はその対象に巻きこまれているという考え，また社会についての批判理論は，決して伝統理論が要求するような類の価値自由を標榜しないという主張，これらは後のフランクフルト学派の批判理論における基本的なモチーフとなる。しかし同時に，ホルクハイマーの「伝統理論と批判理論」というテクストには，後のアドルノやハーバーマスによる批判理論の定式化には見られないような言明が散見される。それは，古典的マルクス主義の諸前提にかなり忠実な言明である。

1920 年代のルカーチや K・コルシュに端を発するとされる「西欧マルクス主義」は，特にその端緒においては，教条化したボルシェヴィズムや第二インター系のマルクス主義に対して，マルクス主義の「再哲学化」を唱えた。それは，硬直した上部構造－下部構造図式や経済決定論に対して，主体と客体の弁証法や後に言われるようになる上部構造の相対的自律性という概念を提起する。「西欧マルクス主義」の潮流に属し，かつそれを代表するフランクフルト学派の批判理論も，一貫してそのような志向性を保持し続けている。1931 年にホルクハイマーが「社会研究所」の所長に就任して以来の「学際的唯物論」のプログラムや哲学と個別科学を架橋しようとする試み，マルクス主義のヘーゲル主義的展開やマルクス主義的社会理論への精神分析の導入等にそのことが如実に表われている。にもかかわらず，「伝統理論と批判理論」の以下のような文言には，古典的マルクス主義の公理が，なお明瞭に見てとれる。「古い世界は，時代遅れの経済的組織原理がもとで没落する。文化の頽廃は，そのことと結びついている。経済が困窮の第一原因であり，理論的・実践的批判はまず経済に向けられなければならない。」(9) もちろんホルクハイマーは，史的唯物論の適用対象を特に資本主義社会に限定したルカーチと同様，経済という審級が未来永劫にわたって他の審級を支配しつつ機能するとは考えなかった(10)。すなわち，人間が自動展開する経済的メカニズムの下僕になっているような「必然の王国」にふさわしい概念装置が史的唯物論であって，そのような概念装置が将来到来するかもしれない「自由の王国」の社会的諸関係を記述したり説明したりできるわけではないのである。しかし，当面の社会と人間のあり方を探索しようとする場合には，経済に照準をあわせる必要がある，と彼は考える。そのような立場に対しては，「西欧マルクス主義」が全体として批判しようとしてきた経済主義ではないのか，という嫌疑が当然予想されようが，しかしホルクハイマーは，「批判理論は，専門経済学に解消されたわけでは決してない。政治が経済に従属することは，批判理論の対象だったのであり，批判理論がめざすプログラムといったものではない」(11) と主張することによって，このような批判を斥ける。経済，あるいは経済学に対するこういった態度の取り方は，まさしくホルクハイマーが批判理論のモデルと見なしたマルクスの政治経済学「批判」と同一であろう。したがって彼は，「経済主義に対する批判は，経済分析の放棄という点にではなく，経済分析の完全を期し，歴史的に示された方向をとるべ

く迫る点にある」(12)と断言するのである。そして，批判理論が経済分析を通じて明らかにしようとする事態は，次のようなものである。それは，かなりオーソドックスなマルクス主義的見解であり，明示こそされてはいないが，また必然的移行というニュアンスは欠落しているが，そこからは資本主義から社会主義，共産主義への移行の可能性というヴィジョンが読み取れる。

> 批判理論によると，現在の経済を本質的に規定しているのは，人間が自分たち自身の必要以上につくり出す生産物が，直接社会の手に渡るのではなく，私的に領有・売却されるということである。この状態の止揚ということで考えられているのは，経済の高次の組織原理であって，哲学的ユートピアでは決してない。(13)

後の時代に定式化された批判理論と比較して，この時代のホルクハイマーが考えていた批判理論は，経済的審級にかなり重きが置かれており，またそれと同時に資本主義社会を止揚した「経済の高次の組織原理」を解放された自由な人々の連合と重ねあわせるようなヴィジョンを有していたが，ではそのような新たな社会をもたらす変革の主体について，当時の彼はどのように考えていたのであろうか。

おそらくは 1930 年代の H・マルクーゼの仕事（当時発見されたマルクスの初期草稿に触発された労働概念を軸とした人間学的考察）にも影響されることによって，ホルクハイマーの初期批判理論の構想には労働概念が深く入りこんでいた。批判理論は，物象化され「第二の自然」として凝固してしまった社会的諸関係の変革を志向するが，そもそも社会の理性的な組織化という理念は，ホルクハイマーによれば人間の労働に内在しているものなのである。ここでは，人間が目的意識的に自然に働きかけ，それを加工することによって自らの類的本質を顕現させる「自然と人間との物質代謝」というマルクスの労働モデルに，ホルクハイマーは忠実に従っているように思われる。マルクスやエンゲルスは，労働に内在する人間の能動性という契機はプロレタリアートにおいて経験され実現されるとしていたが，それに対してホルクハイマーは「プロレタリアートの置かれた状況にしても，この社会のなかでは，正しい認識ができるという保障にはならない」(14)と主張する。マルクスやエンゲルスが解放的潜勢力と見なしていたプロレタリアートは，ホルクハイマーにとってはもはや批判理論の自明の「名宛人」とはなりえない。なぜなら，他の階級同様，プロレタリアートの意識もまた，「イデオロギー的に狭隘化され，堕落させられることがありうる」(15)からである。主体＝客体の同一性の実現を保証するとされるルカーチ的なプロレタリアートの階級意識に，ホルクハイマーはもはや信を置くことができない。にもかかわらず，彼は次のように主張する。

> けれども，理論家と理論家特有の能動性が，被支配階級と動的な統一をなすものと見ら

れ，その結果，彼の行なう社会的矛盾の叙述が，具体的な歴史的状況の一つの表現として現われるだけでなく，それと同じくらい，その状況のなかで刺激を与え，変化を促す因子として現われる場合には，そこに理論家の機能が浮かび上がってくる。(16)

ここで，およびこの後の箇所でもホルクハイマーは，「階級のなかでの進歩的な部分」と「彼らに関する真理を述べる部分」との「動的な統一」がもつ，社会全体の転換をもたらすかもしれないポテンシャルを示唆している。いささかレーニン主義的な響きをもつ「彼らに関する真理を述べる部分」とは批判理論家のことであり，「階級のなかでの進歩的な部分」とは前後の文脈からしてプロレタリアートであることは明らかである。ナチズムがヨーロッパを席巻していた時代にあって，その多くが現実にヒトラーを積極的に，あるいは熱狂的に支持していた労働者階級に対して，ホルクハイマーはほとんど絶望しつつも，しかしなおかすかな期待をもち続けているように見える。1937 年の時点ではホルクハイマーはまだ，ルカーチのようにそこからただちに革命的主体を演繹するのではないにしても，「自分の置かれた境遇からして真理に至るべく定められている階級」(17)としてプロレタリアートを同定し，そこになお一縷の望みを託しているように思われる。しかし，このような望みは，そしてそれを支えるマルクス主義的な諸前提は，アメリカでの亡命生活を経た第二次世界大戦後には，批判理論から決定的に失われることとなる。

2. 批判理論と全体性――実証主義論争における Th・W・アドルノ

1933 年のヒトラーによる政権掌握以来，研究所ごとの流浪を余儀なくされた社会研究所のメンバーたちの多くが行き着いた先は，アメリカのコロンビア大学であった。コロンビア大学の一角の仮寓で研究所は再開することとなり，ホルクハイマーから少し遅れてアドルノもまた，イギリスから大西洋を渡ることとなる(18)。ホルクハイマーやアドルノがアメリカに到着した 30 年代の末には，当初彼らが長続きはしないと考えていたナチス・ドイツの体制はますますその勢いと暴虐ぶりを増し，1939 年のヒトラーによるポーランド侵攻で火蓋が切られた第二次世界大戦の開始後ほどなくして，その体制はヨーロッパ中を席巻することとなる。ナチズムの嵐から逃れるなかで全体主義的体制や権威主義的国家に対する考察を深めていこうとする彼らにとって，批判の準拠点となりうるのは，スターリニズムに染め上げられたもう一つの全体主義的体制では毛頭なかった。また，亡命先であるアメリカの「自由で民主主義的な社会」でもなかった。「文化産業」によって人々の意識や欲望が操作され，現状をラディカルに越える精神の自由を喪失した「管理された世界」は，彼らにとって何ら希望を与えるものではなかったのである(19)。そのようななかで 1940 年代前半に「黒いページ」に埋めつくされた「暗鬱な学」の成果であるホルクハイマーとアドルノの共著『啓蒙の弁証法』が書かれる。

『啓蒙の弁証法』という書物は，批判理論のデッド・エンドを示しているとしばしば言われてきた[20]。確かに，「主体性の原史」にまで遡って人間の理性と支配との絡みあいを暴き出し，啓蒙が野蛮へと転化する顛末を酷薄に描いたこの本は，今ここでの社会を的確かつ批判的に解明することにどれだけ寄与しうるのかが明らかでないし，啓蒙による啓蒙の批判，理性による理性の批判は自らの寄って立つ基盤を浸食する結果に終わるだけなのではないか，という疑問は免れないであろう。しかし，『啓蒙の弁証法』以後のホルクハイマーとアドルノが，『啓蒙の弁証法』の思考圏内にとどまってひたすらペシミズムと諦念のうちに思索を続けたとは必ずしも言えない[21]。A・デミロヴィッチが詳細に論じているように[22]，戦後フランクフルトに再建された社会研究所での彼らの課題は，破壊されたドイツの民主主義的な再建，特にナチ体制以後の人々の，とりわけ青少年の民主的なメンタリティの涵養に向けられた。そのために研究所は戦後，多くの経験的社会調査に基づく共同研究を実施している。そのなかには，「戦争捕虜からの帰還兵の政治意識および帰還兵協会の政策についての研究（1956–1959），機械化のレヴェルと賃金支払い形態，および能力給の危機の原因と諸側面についての研究（1957–1962），成人教育の諸問題と可能性についての研究（1960–1961），1959/60年の反ユダヤ主義的な集団暴行についての研究（1960–1961），学生代表を事例とした，学生の大学に対する関係についての研究（1961–1965），ドイツ帝国党についての世論調査（1960–1965），ドイツのジャーナリズムにおける全体主義的傾向についての研究（1961–1966），アイヒマン裁判・『シュピーゲル』事件・バーデン＝ヴュルテンベルク州での金属労働者ストライキに関する世論調査（1962–1966），〈ゲスト労働者（Gastarbeiter）〉と〈外人労働者（Fremtarbeiter）〉という概念の政治的な意味内容についての研究」[23]などが含まれていた。

戦後ドイツのそのときどきのアクチュアルな問題についての調査・共同研究とならんで，ホルクハイマーやアドルノにとって重要な課題となったのは，戦後ドイツにおける二つの学問的潮流に対する闘いであった。一方の精神科学的伝統に棹さす，政治的に保守的で高踏的な教養主義的潮流，他方の特に社会学において1950年代後半から顕著になってきた実証主義的潮流がそれである。後者は確かに前者のように精神の高みへと自らを置こうとするような高踏的な態度を示すことはないが，自然科学的な認識理想を掲げて個別テーマごとに社会的現実をありのままに写しとろうとする後者もまた，当の社会的現実を没批判的に再生産する社会的契機となる，と彼らは考えた。社会学における実証主義的潮流に対する闘いは，1950年代から60年代にかけて，とりわけドイツ社会学会内部での，H・シェルスキーやR・ケーニヒらとの学問政治的な対立という形で現われる。1961年のドイツ社会学会の研究集会によって火蓋を切られた科学哲学者のK・ポパーおよびその支持者たちとのいわゆる「実証主義論争」は，1950年代から続くフランクフルト学派と実証主義的，科学主義的勢力とのドイツ社会学会を中心とした論争の延長線上に位置づけられると言えよう。1930年代にホルクハイマーによって定式化された批判理論のプロトタイプと1960年代にフランクフルト学派として対外的に示された

批判理論との差異を示すために，以下ではこの「実証主義論争」におけるアドルノの主張を見ていくことにする。そこには確かに，前章で言及したような批判理論の基本的スタンス，すなわち事実なるものへの物神崇拝的態度への批判，事実は社会的に幾重にも媒介されているという認識，認識主体と客体は単純に分離さえず，むしろ認識主体はその対象に巻きこまれているという考え，また社会についての批判理論は，決して伝統理論が要求するような類の価値自由を標榜しないという主張は見てとれる。しかし，当時の学派の立場を代表していると思われるアドルノの批判理論は，マルクス主義的な諸前提からはかなりの距離がある地点へと到達しており，そこでは全体性と媒介という，よりヘーゲル主義的な概念が主要な役割を果たしているように思われる。

1961 年の 10 月にチュービンゲンで開催されたドイツ社会学会の研究集会に，ポパーはゲストとして招かれ，「社会科学の論理」と題された講演を行なった。これに対してアドルノは，「社会科学の論理に寄せて」というタイトルで応答し，その後それぞれしばらく時をおいてアドルノ側のハーバーマス，ポパー側の H・アルバートおよび H・ピロートが議論を引きとる形で論戦を交わしている。アドルノによる長文の「序文」が付されて『ドイツ社会学における実証主義論争』という書物が出版されたのは，最初の研究集会から八年後の 1969 年であった(24)。本稿では，必ずしもそこでは議論がうまくかみ合っているとも，そのなかから双方にとって建設的な成果が生まれたとも言いがたい論争そのものに立ち入ることは控え，この論争のなかでアドルノが示した批判理論の要点のみに照準を合わせるために論争に関連するアドルノの論考を見てみることとする(25)。

アドルノはまず，ポパーおよび実証主義者たちが科学的な理論構成を考えるに際して抱いている「斉一的であって，可能な限り単純で数学的にエレガントな説明を行なうという認識理想」は，実は斉一的なものでもなければ単純なものでもない社会を認識の対象にする際には役には立たない，と考える。ホルクハイマーも「伝統理論と批判理論」で批判したデカルト的認識理想や理論モデルは，「矛盾に満ちつつも規定可能なもの，合理的であると同時に非合理的なもの，体系であると同時に砕け散ったもの，盲目的な自然であると同時に意識によって媒介されているもの」である社会を適切に扱うことはできないのである(26)。社会学における形式社会学と経験的社会学の対立から帰結した後者の優勢は，決して経験的方法の優位を示すものではない。経験的方法の限界は，事態（Sache）に直面するなかで示される。「一般に経験的社会研究の客観性は，方法の客観性であって，探求されるものの客観性ではない」(27)のであり，したがって客観性を標榜する経験的方法は，逆説的に主観的なものを優先させているのである。ここでは，アドルノが一貫して批判する「方法の優位」が経験的社会学を貫いていることが指摘され，そして晩年のアドルノの哲学的主著『否定弁証法』で彼がさまざまに変奏しつつ繰り返し説いている「客観の優位」が示されている。「観念論に対する勝者であると自負しているこの実証主義的諸理論は，批判理論よりもずっと観念論に近い。すなわち実証主義的諸

理論は，認識主観を実体化しているのである。産出する主観，絶対的な主観としてではないが，すべての妥当の，科学的制御の知性界として認識主観を実体化しているのである。」(28)

アドルノによれば，社会における客観性とは「その内部で人々が行動している諸関係や諸制度や諸力」(29)なのであり，実証主義的・経験的社会学はそれらを一切無視するか，あるいはテーマになりえないものとして周辺化してしまう。社会学が扱うべき事態にはそのような客観性の一部として「経済的客観性の強制」や「社会的権力の差異」も含まれているのであるが，実証主義的・経験的社会学は，方法に優位を与えることにより，方法自体を物神化すると同時に事態も物神化しているのである。社会は普遍的なものと特殊的なものとの緊張により「不一致のなかでその統一を保っている」のであるが，そのような緊張や不一致ゆえに，デカルト的な自然科学があてにできたような類の同質性を社会はもっていない。自然科学においては，一片の鉛の特性がわかればすべての鉛の特性が推論可能となるが，「社会科学の諸法則の普遍性は，そもそも個々の断片がぴったりとはめこまれる概念的外延の普遍性ではなく，常に本質的に歴史的に具体化された普遍的なものと特殊的なものとの関係にかかわるのである」(30)。

アドルノはすでに，アメリカ亡命中に研究所の仕事とは別に P・ラザースフェルドの「ラジオ・リサーチ・プロジェクト」に参加し，そこで経験的社会調査の技法に触れ，その技法の問題性を痛感していた。実際，ラザースフェルドとの一触即発の確執は，かなり根深いものであった(31)。実証主義論争においても，アドルノは 1930 年代のホルクハイマーと同様に，社会学が処理する事実やデータを所与のものとして物神崇拝的に扱うことを批判している。しかし，ホルクハイマーが伝統理論に立脚する専門学者たちの依拠する「事実性の総括」の背後に社会的実践，すなわち労働の集積をまずもって看取し，それによって事実やデータの社会的規定性を示すのに対して，アドルノは社会の特定の審級を際だたせることなく「全体性（Totalität）」という概念を用いてその媒介性を指摘する。すなわち，社会学が処理するデータは，無性質のデータではなく，社会的全体性の連関によって構造化されているのである。全体が直接的に支配を行使するようなプリミティブな社会とは異なって，曲がりなりにも民主的に統治されている資本主義的産業社会においては，その全体性は媒介のカテゴリーであって，社会的全体性は個々の契機を通じて自らを生産・再生産する，とアドルノは考える。「諸事実は，旧式の認識論の感覚的データといった原型に従って支配的社会学がそう見なすような，最終的なもの，不可侵のものではない。諸事実のなかには，諸事実自体ではない何ものかが現われる」(32)のであり，アドルノはそのような事態を全体性という概念で指し示そうとしている。

全体性という概念は，たとえばそれを強調したルカーチにおいては認識と実践の目標という意味で肯定的な概念であったが，アドルノの場合それは肯定的カテゴリーではなく批判的なカテゴリーとしてのみ意味をなす。したがって，全体性のカテゴリーを駆使する弁証的批判は「全体性の言いなりにならないもの，全体性に反抗するもの，まだ存在しない個別化の潜勢力としてのみ自らを保つものを救い，確立するよう助ける」(33)のである。事実の記述や説明とは

異なるアドルノにとっての「解釈」とは，現象の社会的観相学（Physiognomik）の仕事であり，「社会的所与の様相において全体性を認知する」ことを意味する。

アドルノは，ポパーによる社会科学的認識における問題の優位についてのテーゼに賛意を表しつつも，社会学における優れた意味での問題とは，研究者がそのつど自らの関心の赴くままにピックアップするようなテーマではなく，「自らと自らの成員とを生存させると同時に破滅の脅威にさらしもする」社会そのものであることを主張する。全体性としてのそのような社会を認識するということは，それをあるがままに写しとるということを決して意味しない。アドルノは，ポパーの報告に対して次のように発言している。

> 社会――それの認識をこそ社会学は終局の目標としているのですが――は，社会学が単なる技術以上のものであろうとするならば，一般に正しい社会についての観念のまわりにのみ結晶するでしょう。だが正しい社会とは，既成の社会に対して抽象的に，まさにいわば価値として対比されるべきものではなく，批判から，したがって社会をその矛盾や矛盾の必然性によって意識するところから発現してくるものです。(34)

> 社会的現実の矛盾に満ちた性質についての経験は，決して任意の出発点ではなく，そもそも社会学の可能性をはじめてつくり出す動因です。社会を現状とは異なったものとして思考できるものにとってだけ，社会は，ポパーの言葉に従えば，問題となるのです。(35)

「社会を現状とは異なったものとして思考する」能力は，H・マルクーゼの言う「一次元的人間」（これも 60 年代初頭に出版された著作である）には決定的に欠落した批判的理性の能力であるが，アドルノは，マルクーゼとは違って現状とは異なった社会とはどういうものかについては具体的には描かなかった。また，社会的矛盾や現状とは異なった社会について語る際に，少なくとも実証主義論争におけるアドルノの語彙には，1930 年代のホルクハイマーとは異なってマルクス主義的な用語はほとんど見られない。「利潤率低下の傾向から演繹されたマルクスの崩壊法則」とか「社会が集中へ，過剰蓄積へ，恐慌へと進む発展諸傾向」といった言葉は見いだせるが，それらにしても弁証法的論理の一例として引きあいに出されているだけで現代社会の基底を言い表わす言葉として用いられているわけではなく，ましてや社会的現実に関する何らかの論がそこから展開されているわけでもない。唯一アドルノが好んで用いるのは，後期マルクス，特に『資本論』のマルクスに触発された，対象のあらゆる質を捨象してそれを代替可能なもの，利用可能なものにしてしまう「交換価値」や「交換原理」という概念である。しかし，M・ジェイが言うように，交換原理の普遍性についてはマルクスとアドルノの間には重要な相違がある。マルクスは，交換原理を資本主義社会の特徴をなすものと考え，同時にそれをもっぱら資本主義に限定しているのであるが，「アドルノはこの原理を拡張し，広

い意味で理解された啓蒙全体の属性としたのである。」(36)

社会の変革可能性に関するアドルノのペシミズムは，批判理論を実証主義的社会学に対して擁護することを通じて戦後ドイツの民主的で批判的な政治文化の進展に寄与しようとする意図とは裏腹に，批判理論の名宛人を見いだしたり名指したりすることを妨げた。マルクーゼや条件づきではあるがハーバーマスとは異なって，彼は 60 年代の学生運動やニュー・レフトのアクティヴィズムに期待を寄せることはなかった。そのかわりに彼は，倦むことなく同一性論理を批判する著作（『否定弁証法』）や同一性の呪縛から逃れるかすかな希望を芸術のミメーシス的契機に求める著作（『美の理論』）に没頭したのである。

> 他ならぬ非同一性の力の強調が意味しているのは，アドルノが信頼を寄せることができたのは，全体の力に抗する行為者のうちでも最も個人主義的な行為者だけだ，ということである。媒介ということを強調するにもかかわらず，アドルノは（中略）個人と全体性との間にある具体的な社会的諸力および社会的形式の探求を，実際にはほとんど試みていない。ミクロなレヴェルでの極小の細部の力説が，マクロなレヴェルでの巨大な全体の強調と手を携えて進むのである。(37)

3. 批判理論と解釈学的地平――実証主義論争における J・ハーバーマス

ハーバーマスが 1960 年代初頭まで抱いていたヘーゲル主義的マルクス主義のパラダイムから離脱する転換点となったのは，実証主義論争である(38)。実際，アドルノを擁護しポパーを批判するために 1963 年に書かれた「分析的科学理論と弁証法」では冒頭に，社会を全体性として概念化し，個別的なものとの弁証法的関連のうちに把握する必要が説かれている。そのうえで，社会的現象を経験的規則性の機能的連関として具体的な個別経験領域から切り離す機能主義的システム概念から弁証法的全体性概念を区別する。しかし，この論考の大半では，ヘーゲル主義的マルクス主義とは，そしてアドルノの弁証法的全体論とはまったく異なる学説的伝統，すなわち現象学的解釈学に依拠した議論が展開されている。そういった傾向は，ポパー主義者の H・アルバートによる自らへの批判に応答した 1964 年の論考「実証主義的に二分割された合理主義への反論」ではさらに著しいが，この 1963 年の論考でも次のように述べられている。

> 理論的発端は，社会学的研究そのものが所属する全社会的な過程と関わることを要求されるが，このことは同じように経験を指示している。しかし，この種の洞察は最終的には，次のような経験，すなわち生活史的に中心が定められている社会的環境という共鳴板を，したがってすべての主体によって獲得された教養を，単に主観的な要素として切り捨てて

しまうことのない，前－科学的に蓄積された経験という基礎から出てくるのである。全体性としての社会についてのこの先行的経験は理論の企図に方向を与え，その理論のうちで分節化され，その構成を通じて理論はあらためて経験に即して制御される。(39)

分析的－経験的方法は，自らが定義する一つの経験，それも方法的に整序され統制された経験のみを許容しようとするが，弁証法的社会理論すなわち批判理論は，生活世界において「前－科学的に蓄積された経験」の全スペクトルのなかに自らを位置づけるのである。実証主義や科学主義を批判するにあたってハーバーマスは，ホルクハイマーのような労働に定位した実践概念や，アドルノのような普遍と特殊のせめぎあいのなかで姿を現わす全体性概念に依拠するのではなく，日常的実践における解釈学的な先行了解（Vorverständnis）との関連において理論を位置づける。分析的－経験的方法は，このような先行了解の上に自らが立脚していることを見ぬくことなく「純粋理論の仮象」を追い求めているのである。

ポパーは，確かに素朴な経験主義者とは異なって事実をアプリオリに理論と無関係に存在するものとはとらえていないが，それにもかかわらずハーバーマスは，ポパーが「方法的に確定されたわれわれの経験の組織に依存しているプロトコル的確認が〈事実〉への端的な対応関係をもつ」(40)と考えることによって，問題のある真理対応説（Korrespondenztheorie）に固執している，と考える。事実確認の経験的妥当性という概念がどういう意味をもっているのかは生活世界の地平において前もって規定されているのだが，真理対応説は「事実」をそれとは無関係にそれ自体で存在するもの（Ansichseiendes）と想定してしまう。ここでは，経験科学的な理論と「事実」との連関を根本的に分析する必要があり，そのことによって「経験についての事前の解釈枠組み」が明らかになるであろう。このようにして，ホルクハイマーやアドルノとは異なったやり方で，ハーバーマスは事実を産出されたものとして把握し，実証主義的事実概念を「媒介されたものに直接性の仮象を与える物神」と見なすのである。

分析的－経験的方法は，一般に研究に対して「価値自由」の要請を課す。それは，事実と決断の二元論を前提にしている。一方に自然的・歴史的現象における規則性があり，他方に人間的行動の規則性すなわち社会的規範が存在する。「価値判断の規範的内容は事実確認の記述的内容から導き出されえず，あるいは逆に，記述的なものは規範的なものからは決して導き出されえない」(41)のである。規範的なものは決断に委ねられ，かくしてわれわれにとって意味をもつ生活実践上の問題は，諸科学一般の地平から消去されることになる。しかしながら，研究およびそれを担う研究者は，社会的規範から離れて，それを超越して存在するわけでは決してない，とハーバーマスは考える。「研究とは一緒に行動し相互に話しあう人間たちの一制度である。このようなものとして研究は，研究者たちのコミュニケーションを通じて，理論的に妥当性を要求できるものを規定する。制御された観察が，法則仮説の経験的適切さについての基礎であるという要求は，すでに特定の社会的規範の先行了解を前提としている。」(42)

事実の観察によって得られた実証主義者の基礎命題が自明な妥当性をもつかのように思われるのは，それもまたわれわれのプラグマティックな「習得された行動の安定性」に支えられた，前－科学的な「潜在的信念」に基づくものである。ここでハーバーマスは，分析的－経験的方法によって導き出された法則仮説や経験的理論の妥当性を，「はじめから間主観的な連関のなかで労働している集団が，社会的に習得してきた一種の行動成果という基準」(43)と関係させる。そして彼はここでさらに，1965 年にフランクフルトの哲学・社会学の教授就任演説でその概略を示し，1968 年に刊行された『認識と関心』で本格的に展開した「認識を導く関心」という概念を導入する。「研究過程の社会的生活過程との連関」は認識を導く関心によって示されるのであり，経験的－分析的諸科学は技術的認識関心に，すなわち「自然的状態の強制のもとで社会的労働によって生活を維持するという関心」に導かれている，とハーバーマスは主張する。『認識と関心』では，道具を用いて自然を支配する技術的関心，間主観的な相互了解に対する実践的関心，暴力や不正な強制を廃絶しようとする解放的関心という三種の関心が認識を導く関心としてあげられることになるが，対象を特定の方法的視角からありのままに捉え操作可能なものへと転換しようとするのは，あらかじめ特定の技術的関心に背後から支えられている態度なのである。確かに「科学的情報の記述的価値は異論を唱えられてはならない」ものではあるが，だからといって理論一般が「事実や事実間の関係を模写する」ことと同義であると考えられてはならない。「記述的内容は，指示することのできる状況内での結果を制御された行動のための予測との関係でのみ，妥当するのである。」(44)したがって「厳密な認識という排他的な権利主張は，他のあらゆる認識を導く関心を，ただ一つの，厳密な認識が決して意識することのない関心のための家来とするのである。」(45)そういった権利主張は「科学的批判の公開性を破壊する科学的サブカルチャーのエスノセントリズムを促進するだけである」と，ハーバーマスは批判する。

実証主義論争以後のハーバーマスは，実証主義論争の渦中で自らの概念装置の中心にすえた解釈学的地平を『認識と関心』において展開する。しかし，そこで提起された認識を主導する三つの関心については批判が集中し，やがて彼は，疑似先験的で人間学的な含意すら読みこめるこの理論枠組みを事実上撤回する。その後彼は，イエナ期の初期ヘーゲルに依拠する形で「労働と相互行為」という認識視角から問題を新たに立て直し，「批判理論のコミュニケーション論的転回」，さらには自らのコミュニケーション論に英米系の言語哲学や語用論を大胆に組みこむことによって「言語論的転回」を果たしていく。しかし，ハーバーマスの批判理論の最初にして最大の転回は，こう言ってよければ「批判理論の解釈学的転回」とでも呼びうる実証主義論争のなかで生じた転回ではなかろうか。

確かにハーバーマスの批判的社会理論は，実証主義論争における彼の論考においてであれ，その後今日に至るまでの彼の理論的展開においてであれ，ホルクハイマーやアドルノのそれと批判理論の基本的モチーフを共有している。すなわち，事実なるものへの物神崇拝的態度への

批判や事実の社会的な被媒介性への認識，認識主体と客体は単純に分離できないという考え，伝統理論が標榜する価値自由に対する批判という重要な点では，ハーバーマスは初期批判理論のスタンスから離反してはいない。また，批判理論の課題として，社会批判と科学批判，すなわち物象化する意識への批判と物象化された社会への批判を表裏一体としてとらえる見方も彼らと共有している。しかしそれにもかかわらず，ハーバーマスによる批判理論のパラダイム・シフトは，根本的にホルクハイマーやアドルノが考える批判理論との質的相違を示している。それは，単にかつてのホルクハイマーが多少なりとも堅持していた古典的マルクス主義の用語法や思考様式から大いに隔たってしまっているとか，アドルノのヘーゲル主義的な全体性や媒介や弁証法といった概念を軸にした思考法とも距離を置いているといった理由によるだけではない。認識主観すなわち理論家自身も，その認識主観が概念化する対象的世界も，ともにハーバーマスは孤立したモノローグ的主体を基準にしてとらえるのではなく，間主観的に生産・再生産される実践的な生活連関に内属する対話的主体としてとらえるのである。先に述べた実証主義論争におけるハーバーマスの「解釈学的転回」は，ホルクハイマーやアドルノの社会理論には存在しない批判の準拠点，すなわち理論家自身も常にすでに投げ入れられている生活世界という地平を見いだすことを可能にした。もちろんその際，ガーダマーのように伝承された地平を無批判に受容するのではなく，実証主義的に切り詰められてはいない理性の核をそこからとり出すことがハーバーマスにとっての課題となる。1970 年代から 80 年代にかけての「コミュニケーション的理性」の概念化は，その成果と言えよう。

ハーバーマスはかつて，啓蒙のプロセスには参加者のみが存在するだけであり，啓蒙する側とされる側という固定した図式は社会的に必然的ではあるがフィクションであると述べた(46)。そういう意味で，ハーバーマスにとっては批判理論の名宛人の問題性は，もはや大きな意味をもたないのかもしれない。R・ローティのように「民主主義の哲学に対する優位」を説くわけでは決してないが，ハーバーマスは必ずしも哲学者や社会学者としてではなく，少なくとも主観的には「参加者」としてさまざまな政治的，社会的議論――たとえば，学生運動の位置づけ，ドイツの過去，ドイツ再統一，外国人労働者の権利，コソヴォ内戦，9.11 以後の世界等々をめぐっての議論や論争――に積極的に介入してきた。それは，孤独な思索者がかすかな希望をこめて「投瓶通信（Flaschenpost）」にメッセージを託すといった彼の先輩たちとは，かなり異なる知識人のあり方を示している。したがって，時事的な問題にも積極的に介入し，公共圏に論争や討議をまきおこす「公共的知識人」が構想する批判理論であるという点に，初期批判理論とは異なったハーバーマスの批判理論の最大のメルクマールがあると言えるであろう。

〔注〕

(1) Max Horkheimer, ‘Traditionelle und kritische Theorie’, in *Max Horkheimer Gesammelte*

Schriften Band 4 : Schriften 1936–1941, Fischer Verlag, 1988.（角忍・森田数実訳『批判的理論の論理学――非完結的弁証法の探求』，恒星社厚生閣，1998 年，所収）

(2) Ebd., S.174.（邦訳，182 ページ）

(3) Ebd., S.178.（邦訳，187 ページ）

(4) Ebd., S.179–180.（邦訳，188 ページ）

(5) Ebd., S.184.（邦訳，194 ページ）

(6) Ebd., S.184.（邦訳，194 ページ）

(7) Ebd., S.218.（邦訳，231 ページ）

(8) Ebd., S.219.（邦訳，232 ページ）

(9) Ebd., S.222.（邦訳，235 ページ）

(10) Georg Lukács, 'Der Funktionswechsel des historischen Materialismus', in *Geschichte und Klassenbewußtsein,* Sammlung Luchterhand, 1970, S.356–400.（城塚登・古田光訳『ルカーチ著作集 9　歴史と階級意識』，白水社，1968 年，367–416 ページ）

(11) Ebd., S.224.（邦訳，237 ページ）

(12) Ebd., S.223.（邦訳，236 ページ）

(13) Ebd., S.222.（邦訳，236 ページ）

(14) Ebd., S.187.（邦訳，197 ページ）

(15) Ebd., S.216.（邦訳，227 ページ）

(16) Ebd., S.189.（邦訳，199 ページ）

(17) Ebd., S.216.（邦訳，227 ページ）

(18) この間の経緯についての詳細は，Stefan Müller-Doohm, *Adorno : Eine Biographie,* Suhrkamp, 2003.（徳永恂監訳『アドルノ伝』，作品社，2007 年）に詳しい。

(19) ただし，アドルノとホルクハイマーのアメリカに対する見方，評価の相違は，特に戦後になって分かれてくる。ホルクハイマーは，アドルノほどアメリカ社会を拒否していたわけではなかった。この点に関しては，以下の文献を参照。Thomas Wheatland, *The Frankfurt School in Exile,* University of Minnesota Press, 2009.

(20) フランクフルト学派第二世代のハーバーマスや第三世代のホネットが自らの批判的社会理論の学説的基礎を模索する際の最大の照準点は，常にここにあった。

(21) 戦後『啓蒙の弁証法』は，長らく海賊版として読まれてきたのであり，再刊がかなったのは，1968 年になってからである。

(22) Alex Demirović, *Der nonkonformistische Intellektuelle : Die Entwicklung der Kritische Theorie zur Frankfurter Schule,* suhrkamp taschenbuch wissenschaft, 1999.（仲正昌樹監訳『非体制順応的知識人――批判理論のフランクフルト学派への発展　第一分冊－第四分冊』，御茶の水書房，2009–2011 年）

(23) Ebd., S.787.（邦訳，第四分冊，147 ページ）

(24) Theodor W. Adorno u.a., *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie,* Sammlung Luchterhand, 1972.（城塚登・浜井修訳『社会科学の論理――ドイツ社会学における実証主義論争』，河出書房新社，1979 年）本書には，研究集会直後に R・ダーレンドルフによって書かれた「報告をめぐる討論への注解」と論争に先立つ 1957 年にアドルノによって書かれた「社会学と経験的研究」も収められている。

(25) 『ドイツ社会学における実証主義論争』に収められている「社会科学の論理に寄せて」，「序論」そして「社会学と経験的研究」がそれにあたる。

(26) Adorno u.a., a.a.O., S.126（邦訳，131 ページ）

(27) Ebd., S.84.（邦訳，89 ページ）

(28) Ebd., S.12.（邦訳，12 ページ）
(29) Ebd., S.84.（邦訳，89–90 ページ）
(30) Ebd., S.90.（邦訳，19 ページ）
(31) Müller-Doohm, a.a.O., S.369 ff.（邦訳，284 ページ以下）
(32) Ebd., S.18.（邦訳，96 ページ）
(33) Ebd., S.19.（邦訳，19 ページ）
(34) Ebd., S.139.（邦訳，145 ページ）
(35) Ebd., S.142.（邦訳，148 ページ）
(36) Martin Jay, *Marxism and Totality : The Adventures of a Concept from Lukács to Habermas,* University of California Press, 1984, p.269.（荒川幾男他訳『マルクス主義と全体性――ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』，国文社，1993 年，411 ページ）
(37) Ibid., pp.271–272.（邦訳，415 ページ）
(38) Jay, op.cit., p.471. ジェイは，後期ヴィトゲンシュタインからの影響とあわせて，ハーバーマスへのインタヴューでこの証言を得たようである。
(39) Adorno u.a., a.a.O., S.159–160.（邦訳，166 ページ）
(40) Ebd., S.241.（邦訳，247 ページ）
(41) Ebd., S.171.（邦訳，175–176 ページ）
(42) Ebd., S.180.（邦訳，184 ページ）
(43) Ebd., S.180.（邦訳，186 ページ）
(44) Ebd., S.247.（邦訳，252 ページ）
(45) Ebd., S.186.（邦訳，189 ページ）
(46) Jürgen Habermas, *Thorie und Praxis ; Sozialphilosophische Studien,* suhrkamp taschenbuch wissenschaft, 1971, S.45.（細谷貞雄訳『理論と実践――社会哲学論集』，未來社，1975 年，621 ページ）

（たつみ　しんじ　現代社会学科）
2012 年 10 月 31 日受理